

「さんべボランティアセミナー」

1 趣 旨

- ボランティア活動を始めようとする青年に、ボランティアについての学びの場を提供することで、社会の様々な場面で主体的に活動しようとする姿勢やボランティア精神を育む。
- 先輩ボランティアやボランティアセミナーに参加した仲間とのつながりをつくることで、今後のボランティア活動への意欲を高める。

2 事業の概要

- (1) 期 日
 - ① 令和3年6月12日(土)、6月13日(日)＜日帰り＞
 - ② 令和3年7月22日(木)、7月23日(金)＜日帰り＞
 - ③ 令和3年9月25日(土)～9月26日(日)＜宿泊＞
- (2) 会 場 ①松江市城東公民館、②岩谷奨学会館、③国立三瓶青少年交流の家
- (3) 対 象 ボランティア活動に興味のある青年(高校生、大学生、社会人)
- (4) 参加者
 - ① 大学生20名
 - ② 大学生 7名 ※募集各20名程度
 - ③ 大学生 3名
- (5) 講 師 くにびき自然学校 佐藤 しのぶ 氏、日本赤十字社 職員
国立三瓶青少年交流の家職員、法人ボランティア
- (6) 日程・研修内容
 - ①6/12(土)・②7/22(木)
 - 9:30 オープニング(趣旨説明)
 - 9:45 「青少年教育施設の現状と運営(1.0h)」
 - 11:00 「ボランティア活動の技術(1.5h)」
 - 12:30 昼食
 - 13:30 「ボランティア活動の技術(2.5h)」
 - 16:30 「青少年教育施設におけるボランティア活動(2.0h)」
 - 18:30 終了
 - ①6/13(日)・②7/23(金)
 - 9:30 「安全管理(救命救急)(3.0h)」
 - 12:30 昼食
 - 13:30 「青少年教育(1.5h)」「ボランティア活動の意義(1.5h)」
 - 16:30 クロージング(ふりかえり)
 - 17:00 終了
 - ③9/25(土)
 - 11:00 オープニング(趣旨説明)
 - 11:30 「青少年教育施設の現状と運営(1.0h)」
 - 12:30 昼食
 - 13:00 「ボランティア活動の技術(4.5h)」
 - 17:30 夕食・風呂
 - 19:00 「青少年教育施設におけるボランティア活動(2.0h)」

21 : 00 終了
○③9/26 (日)
9 : 00 「安全管理 (救命救急) (3.0h)」
12 : 00 昼食
13 : 00 「青少年教育 (1.5h)」
14 : 30 「ボランティア活動の意義 (1.5h)」
16 : 00 クロージング (ふりかえり)
16 : 30 終了

3 事業の特色

(1) プログラムデザインと企画のポイント

- 「国立三瓶青少年交流の家ボランティア育成ビジョン」(国立三瓶青少年交流の家 HP 参照：<https://sanbe.niye.go.jp/volunteer/>)において、本事業は「育成の入口」にあたる。ボランティア養成共通カリキュラムを実施する上で、今後ボランティアとして当交流の家へ継続して参加してもらえるよう、「参加者同士だけでなく、先輩ボランティアとのつながりも深めること」「当交流の家でのボランティア活動を理解してもらうこと」を大切にしている。
- 参加者と先輩ボランティアとのつながりも深めるため、先輩ボランティアにも運営をサポートしてもらうようにした。
- 例年大学生をメインターゲットとして広報しているが、今回近隣の島根県立大田高等学校の生徒にも広報し、生徒が参加しやすいよう同校敷地内にある岩谷奨学会館を会場として設定した。
- 新型コロナウイルス感染症予防のため、募集定員を例年の50名から20名に変更すると共に、3回に分けて開催した。
- 法人ボランティアへのニーズ調査では「コミュニケーション能力の向上」を求める声が多いため、コミュニケーション能力を養うことを目指した活動を取り入れた。特に「伝わる」ことの重要性に気づくこと、そしてプレゼンテーションによる演習で「わかりやすく伝える」ことのスキルを学ぶことを大切に企画を構成した。

(2) 運営のポイント

- 参加者同士や先輩ボランティアとの交流を深めるため、先輩ボランティアは運営補助主体ではなく、参加者と共に講義・演習に参加することに専念してもらった。
- 「青少年教育施設におけるボランティア活動」では、先輩ボランティアから当交流の家の事業説明等を行ってもらうことに加え、過去の体験から得た学び・気づきを、参加者に直接語ってもらった。
- 新型コロナウイルス感染症予防のため、以下について取り組んだ。
 - ・研修室の換気の徹底。
 - ・手洗い及び手指消毒の徹底。
 - ・マスクの着用の徹底。ただし、3密を回避できる状況(屋外での活動等)または、身体的負荷を伴う活動の際は、熱中症予防の観点からマスクを外すことも可とする。
 - ・毎朝の検温の徹底および健康状態調査票の記入をする。

(3) 広報のポイント

- 島根大学教育学部については「1000時間体験学修」と連携し、学生を募ることができた。
- 島根県立大田高等学校1・2年生に広報を行った。
- 県内の大学において、宿泊を伴う活動ができたのは島根県立大学浜田キャンパスだけだったため、宿泊を伴う3回目のセミナーについては島根県立大学浜田キャンパスへの広報を集中的に行い、参加者を募った。

4 参加者へのアンケート結果

(1) アンケートの集計 (%)

	満足	やや満足	やや不満	不満
事業全体	92.9	7.1	0	0
プログラム	96.4	3.6	0	0
運営	96.4	3.6	0	0
講義・演習の内容	96.4	3.6	0	0
職員の対応	96.4	3.6	0	0

(2) 参加者の声

- 何事に対しても「自分だったら」ということを常に考え、自分事として考えていきたいと思いました。
- 1日目の「SAP」ではスモールステップでの目標設定の大切さや、チームにおいて重要なことは何なのか、ということについて理解を深めることができた。
- 安全管理について、知識がまず必要だと思いました。その上で手に入れた知識を頭の中で整理し、シミュレーションをしておかないと実際に使えるほどにはならないと思いました。

5 成果と課題

《成果》

- コミュニケーション能力を高めることを目標としていたが、特に「伝わる」ことに焦点を当て、参加者に体験的に学んでもらえるよう活動を構成した。その結果、「伝えるのが大切なのではなく、伝わるのが一番重要だと気付くことができました。」という参加者からのアンケート結果から、コミュニケーション能力を高めるきっかけを作ることができた。
- 年齢・学部・大学を超えて参加者と先輩ボランティアが交流することができ、参加者からも「他大学の学生や交流の家の方々との交流は自分の視野も広がって、とても貴重な時間になりました。」との回答があり、交流を通して参加者の学びを促進することができたのではないかと考える。

《課題》

- 今回初めて高校生への広報を実施したが、結果として高校生の参加者を募ることができなかった。実施日、広報のタイミング、企画内容等を再度検討し次回につなげていきたい。
- 先輩ボランティアが当セミナーに関わってくれたこともあり、参加者同士の関わりだけでなく、参加者と先輩ボランティアとの交流も深めることができたが、カリキュラム上余裕のないスケジュールとなってしまう、「もっと別の参加者と交流したかった」という声もあり、次回はより多くの方々と交流できるように企画していきたい。



(担当：事業推進係 木元 謙太郎)